

追悼特集にあたって

小 泉 晋 弥

一昨年以來、五浦美術文化研究所の發展に多大の寄与をなされた客員所員岡倉古志郎先生、所員西村道一先生及び吉澤南先生が相次いでご逝去された。五浦美術文化研究所として、本誌上で在りし日の先生方を偲び、ご冥福をお祈りすることとした。

追悼文は、それぞれ身近に接しておられた方々にお願ひしたが、特に岡倉古志郎先生に関しては、当研究所の母体である天心遺跡の直接の関係者であり、『五浦叢書』の刊行へのご協力、所員研究会でのご講義などひとかたならぬご貢献を考慮して、複数の方々にお願ひした。ご学友であつた塩田庄兵衛氏が体調を崩されたため残念ながらご辞退された外は、四氏からお言葉をいただいた。

古志郎先生のご子息である岡倉徹志氏は、早くから寄稿を快諾されていたが、富山国際大学での職務が多忙を極められたため、「岡倉古志郎先生を偲ぶ会」で配布された『忘れ得ぬ人々』に掲載された追悼文をここに転載させていただいた。狩谷昌胤氏は、天心の弟岡倉由三郎のご令孫にあたり、古志郎先生とはまたいとこの間柄となる。『五浦論叢』六号では、天心の姪三人が語る想い出の解題をいただいている。客員所員である中村愿氏には、『岡倉天心全集』（平凡社版）以来のご交誼を振り返っていただいた。元所長である森田義之氏には、五浦美術叢書刊行のアドヴァイスなど古志郎先生からの多大なお力添えにつ

いて振り返っていただいた。その折のことは、五浦美術叢書『祖父岡倉天心』の「あとがき」に古志郎先生自らも詳述なさっている。筆者などは、そこに記された過大なご期待に恥じないようにと心がけて、天心研究を進めてきたというのが正直な気持ちである。

また五浦が、茨城を代表する観光と文化の拠点として今あるのも、五浦の将来を案じ続けていた古志郎先生のご見識の賜物といえる。それを象徴するのが、五浦の日本美術院跡地を財団法人日本ナショナルトラストに寄贈されたことである。これによって五浦の美術院跡地は、日本ナショナルトラストの財産寄贈第一号の名譽を永久に担い、日本の史跡保存の新しいあり方を常に世に知らせ続けることとなった。当地は、現在公園として整備されているが、本研究所、茨城県立天心記念五浦美術館、北茨城市、天心偉蹟顕彰会、日本ナショナルトラストの関係者によるこの公園の管理についての協議会が設立され、有り得べき五浦の姿について話しあう絶好の機会が生み出されたのである。今後、これらの関係諸機関や研究者各位の橋渡しを本研究所が果たすことによって、五浦の發展継承に寄与していくことを誓って、古志郎先生追悼の言葉とした。

(こいずみ しんや／本学教育学部教授・五浦美術文化研究所長)